

黙示録18章「倒れるバビロン」

1A 力ある裁き 1-8

1B 悪霊の住みか 1-3

2B 贅沢に対する報い 4-8

2A 世の悲しみ 9-20

1B 王たち 9-10

2B 商人たち 11-17

3B 船舶の人たち 18-19

4B 天の喜び 20

3A 見出されない都 21-24

本文

黙示録 18 章を開いてください。私たちは 17 章から、大淫婦と呼ばれるバビロンの都の幻を読んでいます。それは、地上の王たちとの「淫行」していると呼ばれていました。本来、主なる神のみに自分の魂を任せ、この方に従い、仕えるべきなのに、富と権力に身を任せている姿です。世の制度に組み込まれた宗教です。

そしてこれが、「秘められた意味」であると書かれていました。これは、過去には隠されていたが、今は明らかにされているものです。バビロンという存在は、実にエデンの園から始まっており、そのサタンの墮落と策略が始まりました。バベルの塔において明らかになり、けれども、ネブカドネツアルによる新バビロニア帝国がエルサレムを破壊して、ユダの民を捕え移すことによって歴史の中に出てきました。

そしてヨハネが生きていたのは、ローマの時代です。エルサレムを再び破壊し、ユダヤ人が奴隷として捕え移され、世界に散っていきました。その時、キリスト者もローマから迫害を受けました。ところが後に、ローマ皇帝がキリスト教に改宗します。それ以来、キリスト教会が迫害される側ではなく、時に迫害する側に立ちました。信仰的に世に妥協する人は、結局、信仰によって生きる人々を逆に迫害することも見ました。

しかし、終わりの日に、バビロンが完全な形で現れます。かつてのローマ帝国が復興するような形で十の連合体が現れます。その中で獣が台頭して、その連合体は彼を神とする宗教、世界帝国でまとまります。これは、ダニエル書を見ると分かります。黙示録 17 章でも、御使いによる秘められた意味の中で、解き明かされていました。「17:16-17 **あなたが見た十本の角と獣は、やがて淫婦を憎み、はぎ取って裸にし、その肉を食らって火で焼き尽くすことになります。** それは、神の

ことばが成る時まで、神はみこころが実現するように王たちの心を動かし、彼らが一つ思いとなって、自分たちの支配権を獣に委ねるようにされたからです。」

これから読んでいく18章においては、その女の淫行の部分ではなく、巨大な富のほうに焦点があてられています。彼女は苦しみのない「女王」と呼ばれます。それは、巨大な富を持つため、誰にも支配されず、一方的に富が蓄積されるシステムです。17章では宗教的な部分に焦点があてられていましたが、18章は商業的な部分に焦点を当てています。

16章の七つの鉢の災いのことを思い出しましょう。そこで、最後の第七の鉢がぶちまけられた時に、これまでにない大地震が起こりました。「16:19 あの大きな都は三つの部分に裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。神は大バビロンを忘れず、ご自分の激しい憤りのぶどう酒の杯を与えられた。」この大地震によって、都そのものが破壊されます。けれども、獣が拝まれるは、第七十週目、ダニエルの七年間の半ばから始まりますね。

つまり、第七十週目の半ばに入る時に、獣と他の王たちは、バビロンの宗教の部分を滅ぼします。それが17章の最後です。しかし、バビロンは、商業の部分はそのまま残り、宗教についてはエルサレムで獣が神殿の中であがめられているという体制になっています。18章のバビロンの倒壊は、第七十週目の後半部分で大地震が起こった時に、倒れるということでしょう。

こら辺の理解は難しいかもしれませんが、分かり易いのが、歴史の中では織田信長です。彼はキリスト教の伴天連(宣教師)に対して好意的でした。対して、仏教の勢力を嫌っていました。比叡山の焼き討ちに現れています。本来の僧侶の信仰や修行を忘れて、肉食、飲酒、金儲け、女遊びに耽っていました。そして、信長に対立する大名たちに味方しました。こうして、富や権力に溺れている宗教を焼き討ちにしたのです。けれども、伴天連の一人フロイスは、著書「日本史」の中で、自分の誕生日に、己を神とする祭典を催し、その神体を拝むように参拝を強要したことを記しています。その後で、本能寺の変で殺されています。当時の仏教勢力を憎む政治権力者が、それを滅ぼした後に自らを神としていくという話は、終わりの日の獣の姿に似ています。

1A 力ある裁き 1-8

1B 悪霊の住みか 1-3

¹ その後、私は、もう一人の御使いが、大きな権威を持って天から下って来るのを見た。地はその栄光によって照らされた。

18章では、語っている存在が三つ出てきます。1-3節では、ここの大きな権威を持っている御使いです。そして、4-20節が天からの声です。21-24節までが、また別の御使いです。その初めの1-3節ですが、御使いが大きな権威を帯びて、栄光までを輝かせてやってきました。つまり、神の

権威と栄光を現しているのです。その力と光によって、この地が照らし出されています。そこに照らし出された悪と不正、富は、滅ぼされていきます。

² 彼は力強い声で叫んだ。「倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった。」

御使いは、「倒れた」と二度、叫んでいます。これは、古代のバビロン帝国が倒壊する預言をしたイザヤの言葉から来ているものです。「21:9 見てください。今、戦車や兵士、二列に並んだ騎兵が来ます。彼らは互いに言っています。『倒れた。バビロンは倒れた。その国の神々の、すべての刻んだ像も地に打ち砕かれた』と。」これは、メディア・ペルシア連合軍がバビロンの町に侵入した時の幻です。ダニエル書 5 章には、その最後の晩にベルシャツアルが何をしていたかが書かれています。エルサレムの神の宮から持ってきた器を宴会の場に持ってこさせて、神々の名を賛美しました。しかし、人の手の指が壁に文字を書きました。ダニエルがそれを解き明かし、バビロンが倒れることを告げました。ベルシャツアルは、その夜に彼は殺されました(5:30)。このように、突如として破壊が来たのです。

そしてここが、「悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟」とあります。バビロンの崩壊については、イザヤ書 13-14 章とエレミヤ書 50-51 章に詳しく幻があります。その中で、バビロンは永遠の廃墟となるとあります。「イザ 13:21-22 そこには荒野の獣が伏し、彼らの家々には、みみずくがあふれる。そこには、だちょうも住み、雄やぎがそこで飛び跳ねる。山犬はその岩で、ジャッカルは豪華な宮殿でほえ交わす。その時が来るのは近く、その日はもう延ばされることはない。」このように廃墟となっていますが、そこに同時に、悪霊どもが住まいとしているということです。

主イエスが地上に戻り、神の国を建てられます。その時に、バビロンは、廃墟となって、ふくろうやだちょう、雄やぎや山犬、ジャッカルが徘徊しているような空間になっています。ちょうど、福島原発事故が起こった後、野生動物が家畜に混じって繁殖しているというニュースが流れましたが、そのような別空間になるのでしょうか。そこに悪霊ども、汚れた霊どもが棲みつきます。地上における神の国、千年王国になっても、そこは永遠の廃墟として残され、いわば、地上における監獄のように残っているのです。

³ すべての国々の民は、御怒りを招く彼女の淫行のぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と淫らなことを行い、地の商人たちは、彼女の過度のぜいたくによって富を得たからだ。」

これは、17 章においても宣言されていたことです。どんなの人たちも、この女の淫行から無縁ではありませんでした。福音の真理を受け入れて、世から離れていなければ、必ずこの女の淫行の

ぶどう酒を飲んでいます。世を愛する者は、神を愛していません。神の愛があれば、世を愛することはありません。

そして、この箇所では、商人たちが「彼女の過度のぜいたくによって富を得た」というところです。いわゆる商業主義と呼んでよいでしょう。人の必要のために物資が流通するのではなく、人々が贅沢によって安逸を貪り、良からぬことをしている姿です。かつて、主によって滅ぼされたソドムの町もそのような状態でした。「エゼ 16:49 だが、あなたの妹ソドムの咎はこのようだった。彼女とその娘たちは高慢で、飽食で、安逸を貪り、乏しい人や貧しい人に援助をしなかった。」

2B 贅沢に対する報い 4-8

⁴ それから私は、天からもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わたしの民は、この女の罪に関わらないように、その災害に巻き込まれないように、彼女のところから出て行きなさい。」

ここから、また別の天からの声がしています。「わたしの民」と言って、主自身が呼びかけています。直接的には、終わりの日のユダヤ人の残りの民のことでしょう。神のものとされている民です。彼らは、バビロンではなく、エルサレムを神の都として住むべき人々です。それで、バビロンを離れるように命じられているのです。

バビロンがペルシアによって倒れた時、ユダヤ人の多くがエルサレムに帰還せず、そのまま残りました。帰還する人々は五万人程度でした。けれども、多くはそのまま居残ったのです。そこで定住し、奴隷の身でありながら栄えていたからです。けれども、その安定した生活はすぐに過ぎ去るのだということを神は警告しています。「エレミヤ 51:6 バビロンの中から逃げ、それぞれ自分自身を救え。バビロンの咎のために絶ち滅ぼされるな。これは、【主】の復讐の時、主がこれに報いをなさるからだ。」エレミヤは、何度となく、バビロンから離れ、逃げなさいという主のことばを告げています。預言者ゼカリヤ書も、2 章で、バビロンから逃げなさいという命令を語っています。「2:7 さあ、シオンに逃れよ。娘バビロンとともに住む者よ。」

これは、直接、この啓示の朗読を聞いていたローマ時代のキリスト者にも当てはまったことでしょう。ローマの富や欲望から離れなさい、天のエルサレムを覚えなさいというものです。そして、これは私たち、今の時代に生きる者たちにも語られているものです。世の友となつてはいけません。世から離れ、神のものとされなさい、ということです。「Ⅱコリ 6:16b-17a わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らから離れよ。——主は言われる——汚れたものに触れてはならない。」

⁵ 彼女の罪は積み重なって天に達し、神は彼女の不正を覚えておられるからです。

罪が天に達しているというのは、主が罪に対して忍耐しておられたけれども、今や怒りを示す時だということです。主が忍耐されている時、それは自分の罪はないことにされているとみなして、神を侮って、ますます罪を犯していくのです。神への恐れのない姿は、まるで自分が自分のやりたいようにできるという高ぶりをますます募らせます。

しかし、すべては覚えられています。主は、「彼女の不正を覚えておられる」とあります。「ロマ 2:4-5 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らずに、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」

⁶ あなたがたは、彼女が支払ったとおりに彼女に報いなさい。彼女の行いに応じて倍にして返しなさい。彼女が混ぜ合わせた杯の中に、彼女のために倍のものを混ぜ合わせなさい。

神は、報いの原理をここで語っておられます。自分の蒔いたものは、刈り取るという原理です。バビロンについては、詩篇 137 篇 8 節にもあります。「娘バビロンよ荒らされるべき者よ。幸いなことよ おまえが私たちにしたこと仕返しする人は。」

二倍にして戻すとありますが、これは出エジプト記 22 章 4 節から来ている律法です。物を盗んだ者がいる時に、彼は二倍にして返済しなければならないことが書かれています。なぜなら、物理的に盗んだ物を返してもらうのは当然のことです。けれども、物を盗むということは、その所有者の尊厳や権利、主の与えられたものに害を及ぼすことです。それゆえ、その精神的損傷を補うために、その物品や所有物を返すだけでなく、同じものをさらに加えて返します。そこで、自分たちがバビロンから取られたものを、二倍にして受け取るのは当然の権利だ、ということです。こうやって、神の民が、バビロンに、主にあって裁くことを命じておられます。

⁷ 彼女が自分を誇り、ぜいたくにふけた分だけ、苦しみと悲しみを彼女に与えなさい。彼女は心の中で『私は女王として座し、やもめではない。だから悲しみにあうことはない』と言っているからです。

高ぶりに対して裁きを下されます。バビロンが安心している姿を、イザヤは預言しました。「47:8 だから今、これを聞け。楽しみにふけり、安心して住む女よ。心の中で、『私だけは特別だ。私はやもめにはならないし、子を失うことも知らなくてすむ』と言う者よ。」私だけは特別だ、を直訳すると、「わたしだけで、他にはいない」というものです。主ご自身がご自分のことを言い表す時に使われた言い回しです。それを言っているのですから、自分は神のように、自分だけには苦しみは来ないと思っているのです。女王の座に座している、とありますね。

私たちの受けている恵みを、恵みと思わずに、神に感謝しない心は、必ず人を高ぶらせます。今の自分なのは、一方的に神の憐れみがあるからで、そうでなければ、たちまち滅んでしまう存在であることを知りません。そして、自分たちだけは大丈夫だと思っています。これが、女王の座です。イエスが、いわゆる不幸にあった人たちのことについて、「あなたがたも、悔い改めないなら、同じように滅びる」と警告されたことを思い出してください。「ルカ 13:4-5 また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも多く、罪の負債があったと思いますか。そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

⁸ これらのことのため、一日のうちに、様々な災害、死病と悲しみと飢えが彼女を襲います。そして、彼女は火で焼き尽くされます。彼女をさばく神である主は、力ある方なのです。」

「一日のうちに」であります。イザヤなどが預言した通りです。富によって高ぶっている時の破壊は、突如としたものです。ベルシャツアルが事実、その日のうちに殺されました金持ちの喩えは有名ですね。「ルカ 12:20 愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」

そして、主は「力ある方」です。裁きにおいて力ある方です。バビロンがどんなに、だれも制御できない力を持ち、世界全体を支配しても、主は落とし前を付けてくださいます。

2A 世の悲しみ 9-20

そして次、9節から19節は、世の悲しみが書かれています。バビロンが倒れたことによって、三種の人々が嘆き悲しみます。地上の王たち、次に地上の商人たち、それから船舶で働く人々です。自分たちの収益が無くなることに対して、嘆き悲しんでいます。

ここからの預言は、ツロに対する神の裁きの預言が背景になっていると思われます。エゼキエル27章です。ツロは、今のレバノンにある、当時の都市国家です。地中海をまたにかけて、その沿岸地域に植民都市を造って行きました。海軍が非常に強かったので、地中海の世界貿易を占有していました。ツロに莫大な富が集まりました。けれども、バビロンによって包囲され、次にギリシアによって包囲されて、滅ぼされます。タルシシュ船という、最大級の国際貿易の船が、その栄えの絶頂期に、海の真ん中で沈んでしまいます。そして、船員たちも、商人たちも、王たちもそのことで大いに恐れ、嘆き悲しんでいる姿が出てきます。

でも、これはツロに対する預言です。けれども、どうして、バビロンに対する預言にツロに対する預言が関わるのか？28章によりますと、ツロの人間の王の背後に、高ぶったケルブがいて彼がまことの王であることが書かれています。サタンのことです。バビロンの王の背後にも、明けの明

星としてサタンが、イザヤ書 14 章に出てきました。同じサタンが、ツロの町にもバビロンの都にも、どちらにも働いているからです。

1B 王たち 9-10

⁹ 彼女と淫らなことを行い、ぜいたくをした地の王たちは、彼女が焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣いて胸を打ちたく。¹⁰ 彼らは遠く離れて立ち、彼女の苦しみに恐れをなして、「わざわざいだ、わざわざいだ、大きな都、力強い都バビロンよ。あなたのさばきは一瞬にしてなされた」と言う。

地上の王たちです。遠くで離れて立っているのは、8 節に「焼き尽くされる」とあるように、高熱の火によって燃えているからでしょう。王たちにとって、彼女の魅力はその力だったので、「力強い都」と言い表しています。その力は、自分たちを動かすほどのものだったので。

表に出て政治権力をふるっている人が必ずしも、すべてを支配しているわけではありません。その政治権力者をも動かしている人々がいたりします。そういった人々はお金を牛耳っていることが多いです。世界情勢や政治を見ていく時に、英語でしばしば言われるのは、Follow the Money です。「お金の後を追いかける」というものです。複雑怪奇に見える事象も、お金の動きを調べると、事の真相が明らかになることが多いです。

2B 商人たち 11-17

¹¹ また、地の商人たちは彼女のことで泣き悲しむ。彼らの商品を買う者が、もはやだれもいないからである。¹² 商品とは、金、銀、宝石、真珠、亜麻布、紫布、絹、緋色の布、あらゆる香木、あらゆる象牙細工、高価な木材や青銅や鉄や大理石で造ったあらゆる器具、¹³ シナモン、香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、小麦粉、小麦、家畜、羊、馬、馬車、奴隷、それに人のいのちである。

商人たちは、バビロンによる貿易によって収益を得ていたので、彼らが最も大きな損害を受けています。午前礼拝でお話したように、世の悲しみは、罪のために悲しむのではなく、損をするから悲しみます。多くの人が、自分が損をして悲しみますが、罪のゆえに悔恨して、へりくだる人は少ないです。世の悲しみは死をもたらすのです(Ⅱコリ 7:10)。

そして、ここにある商品は贅沢品です。ツロに対する神の裁きの宣言において、出て来るような品々です。初めは、貴金属ですね。そして高級な布です。それから、建築の装飾に使われる材料です。それから、香料があり、そして食物です。家畜や馬、馬車もあります。

最後に、「奴隷、また人のいのち」とあります。直訳は「肉体」と書いてあります。つまり、彼らは奴隷にされているだけでなく、商品として肉体が売られていたのです。当時のローマは、コロセウム

という競技場で盛大なエンターテイメントがありました。剣闘士がどちらかが死ぬまで戦います。生きている者たちが、獅子によって食い殺されていくのを見物します。その中に、キリスト者がいました。彼らは生きてまま木にかけられ火あぶりにされ、獅子に食い殺されますが、それを観衆が楽しんで見ていたのです。

今も、人身売買の問題があります。恐ろしいことですが、存在します。そして、ポルノ産業において巨額の金が動いていますが、ポルノは簡単にいうと、女性をその人格ある存在として見るのではなく、単なる肉としか見ていないことです。富のゆえに、人が殺されること、奴隷にされること、肉とだけ見られること、非人間化されるのです。

¹⁴「おまえの心が欲しがる果物は、おまえから遠ざかり、ぜいたくな物や華やかな物は、すべておまえから消え失せて、もはや決して見出すことはできない。」

「くだもの」という表現が興味深いです。「ヤコブ 1:15 **そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。**」心の欲望による実、果物は、あらゆる悪と不正です。そして死を生みます。これらを、主が遠ざけます。そして、「**ぜいたくな物や華やかな物**」は消え失せます。

そもそも、私たちの欲求は、霊的なものが埋められなければ、いつまでも渴いてしまいます。サマリアの女に対してイエスが、言われました。「ヨハ 4:13-14 **この水を飲む人はみな、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。**」主は、ただでこの生ける水をくださいます。しかし、私たちは、商業主義に煽られて、自分の欲が引き出され、それで死と滅びへの引き寄せられるのです。

¹⁵ これらの物を商って彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみに恐れをなして、遠く離れて立ち、泣き悲しんで言う。¹⁶「わざわいだ、わざわいだ、大きな都よ。亜麻布、紫布、緋色の布をまとい、金、宝石、真珠で身を飾っていたが、^{17a} あれほどの富が、一瞬にして荒廃に帰ってしまった。」

商人たちも、遠く離れて泣き悲しんでいます。「**彼女の苦しみに恐れをなして**」と言っていますね。あまりにもの苦しさを見て、近づけません。しかし、彼女が苦しむが可哀そうだと思っているのではなく、あれほどの富がごとく一瞬にして荒廃に帰ってしまうからです。しかし、私たちは平気ですね。元々、これらの富は一瞬にして過ぎ去ることを知っているからです！天に宝を積んでいます。ペテロも言いました。「**I ペテ 1:4 また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。**」

3B 船舶の人たち 18-19

17^b また、すべての船長、その場所を航海するすべての者たち、水夫たち、海で働く者たちもみな、遠く離れて立ち、¹⁸ 彼女が焼かれる煙を見て、「これほどの大きな都がほかにあっただろうか」と叫んだ。¹⁹ 彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫んだ。「わざわざいだ、わざわざいだ、大きな都よ。海に船を持つ者たちはみな、ここでその繁栄から富を得ていたのに、その都が一瞬にして荒れ果ててしまうとは。」

貿易をしているので、船舶業もそこから栄えていました。彼らは、「これほどの大きな都がほかにあっただろうか」と言っています。そうです、世界のすべての富が集まっているようなところが、このバビロンです。しかし主は力をもって、これを一瞬にして滅ぼすことができになります。

4B 天の喜び 20

次を見てください。彼らは嘆き悲しんでいますが、天においては大きな喜びが起こるのです！

²⁰「天よ、この都のことで喜べ。聖徒たちも使徒たちも預言者たちも喜べ。神があなたがたのために、この都をさばかれたのだから。」

あまりにも対照的です。世の愛は神の愛とは相いれないことが、ここによく表れています。ヤコブの手紙では、世の友になれば神の敵になると教えています。私たちが、金銭に対する愛を持てば、神への信仰は根本から崩れます。「I テモ 6:10 金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは金銭を追い求めたために、信仰から迷い出て、多くの苦痛で自分を刺し貫きました。」金銭そのものが悪ではないですが、しっかりと神の管理者として治めていることが求められ、そこには、神の国と神の義を第一に求めるという、しっかりと神への愛がないとできないのです。

パウロがテモテに助言を与えています。富に頼らないようにするための知恵です。「I テモ 6:17-19 今の世で富んでいる人たちに命じなさい。高慢にならず、頼りにならない富ではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置き、¹⁸ 善を行い、立派な行いに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、¹⁹ 来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。」

そしてこの声を上げているのは、「天にいる聖徒たち、使徒たち、預言者たち」です。ここには、患難の時に殉教した聖徒たちはいるでしょうが、他にも使徒たち、預言者たちというのは新約聖書において、教会を建て上げる礎をキリストにあって据えた人々として出て来ます(エペソ 2 章)。彼らもまた、霊的にバビロンの制度、世の制度の中で、その多くが殉教しています。ここで、彼らの信仰について、神が正しい裁きを行なわれたのです。

3A 見出されない都 21-24

²¹ また、一人の強い御使いが、大きいひき臼のような石を取り上げ、海に投げ込んで言った。「大きな都バビロンは、このように荒々しく投げ捨てられ、もはや決して見出されることはない。

三つ目に、声かけをした存在です。別の力強い御使いです。彼は、大きな石を海に投げ入れていて、それが浮かんでこない、永遠に滅んでいる、沈んでいることを象徴して表しました。これはエレミヤが主から行かないなさいと命じられたものと同じです。「51:63-64 そしてこの書物を読み終えたら、それに石を結び付けて、ユーフラテス川の中に投げ入れ、こう言いなさい。『このように、バビロンは沈み、浮かび上がれない。わたしがもたらすわざわいを前にして。彼らは力尽きる。』」ここまでが、エレミヤのことばである。」もう再び浮上して、神を愛する者たちを苦しめることはないのだ、という保障であります。

私たちには、このような安心が必要です。自分を苦しめた者がまたよみがえるならば、そこには恐れがあります。しかし主は私たちを愛するゆえ、決してよみがえることはない太鼓判を押してくださっています。

²² 豎琴を弾く者たち、歌を歌う者たち、笛を吹く者たち、ラッパを鳴らす者たちの奏でる音が、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。あらゆる技術を持つ職人たちも、おまえのうちで、もはや決して見出されることはない。石臼の音も、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。ともしびの光も、おまえのうちで、もはや決して輝くことはない。花婿と花嫁の声も、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。

これは、放漫な生活における喜び、楽しみがなくなることを言い表しています。これが、以前ではノアの時代で、洪水が来る前の状態でした。「マタイ 24:38 洪水前の日々にはノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていました。」このような生活の中で、神のことを思わないでいること。これがすべてなくなります。

^{23b} というのは、おまえの商人たちが地上で権力を握り、おまえの魔術によってすべての国々の民が惑わされ、²⁴ この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出されたからである。」

ここの、「魔術」という言葉は、麻薬によってもたらされる意味合いもあります。つまり、「幻覚」です。商業主義というのは、人々に幻覚を見せるようにさせます。人生、生活の現実の姿を見せないようにさせます。これらは、商人たちが作り出した幻想です。仮想現実にいるようなもので、実質がないのです。その夢から覚めれば、何もないことに気づくようなものです。

そして、世の豊かさの裏通りにある、信仰者の姿です。このような放漫な生活の中で、キリスト者の血が流されていきます。これは、先ほどのコロセウムの話です。ローマは極度に富を持ち、それで人々が退廃していました。エンターテイメントで、人々が血を流すを喜び、その中でキリスト者は血を流していました。

主は、必ず裁かれるということは、この世にあって悲しむ者、苦しんでいる者には慰めです。苦しんでいるテサロニケの人たちに、パウロはこう言いました。「Ⅱテサ 1:5 それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。」

そして私たちは、18章全体から、この世と世の欲は過ぎ去ることを学びました。そして、神のみこころを行う者は、ながらえるのです。最後にヨハネ第一の手紙を読みます。「2:15-17 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」